

令和七年ぎふ清流文化プラザ公演

恋飛脚大和往来 封印切

【配役】

亀屋忠兵衛

梅川

丹波屋八右衛門

槌屋治右衛門

おえん

女中一

女中二

女中三

女中四

(幕開き。梅川とおえん)

おえん　こなさん、みれば顔色が悪いけれど、どこぞ具合でも悪いのかえ。

梅川　忠さんが、身請けの手付をうたしやんして、やれ嬉しやと思うたに、後金ができず、手付の日切りも昨日切り。

そこへあの、意地悪の八つつあんが身請けするともてはやす情けなさ。推量してなさんせいなあ。

おえん　もつともでござんすがな。聞けば忠さんはご養子とやら、固い親御の手前もあり、身請けの金の才覚のつかぬその折には、つき詰めた男気に、ひよんなことにもなりやせんかと、鼻屑に思う心から、大抵やおおかた案じたことじゃないわいなあ。

梅川　よう言うてくださんしやした。今日で十日あまり、忠さんの顔も見ず、あんまり心もとないゆえ、ちよつと忍んで顔など見せてくだしやんせと、最前、文をあげたわいなあ。

おえん　それである、返事はあつたかいなあ。

梅川　それが片たよりじゃわいなあ。

おえん　なんじやいなあ。

(花道に忠兵衛)

忠兵衛　ああ、梅川身請けの後金、できぬさえあるに、手付の日切りも昨日限り。そのことばっかり気にかけていた故に、蔵屋敷に行くつもりで店を出たが、知らず知らず、こんな所へ来てしもうた。ああ、もう、はよ、行きましょ。

ああ、行きましょ。行きましょ。てもなあ、せつかくここまで来て、川の顔見んといくというのも、何や心残りやなあ。ああ、もうもう、一目おうて行きたいが、どうぞ首尾よう、合わせてくれればよいがなあ。

(忠兵衛、木戸から覗く。梅川とおえん、畳算をしている)

忠兵衛 ああ、川とおえんが、畳算をしているが、ありやいったい、誰を待ってるのやろなあ。わしやと申うて中へつーつと入ると、おえんが「忠さん、あんた何しにおいでではったんえ」なんて言われたら、えらい照れくさいなあ。ああ、もうもう。こういうときには、えて間違いのあるものじゃが、まあまあ、それでもあるまい。ちつとやつととお粗末ながら、梶原源太はわしかしらん。

(忠兵衛、木戸を開けて手招き)

忠兵衛 おえんさん、おえんさん。

おえん はいはい、なんや、手だけだして、おえんさん、おえんさんて。気味の悪い。はいはいはい、はい。どなた。忠兵衛 わてです。

おえん ああ。川さん、忠さんがござんした。

梅川 忠さん。

忠兵衛 川。

梅川 忠さん。

忠兵衛 川。

おえん 草履草履。

(女中一、奥より)

女中一 川さん、川さん。もし、川さん。ここで何していやしゃんす。さ、はよう来やしゃんせいな。

梅川 わたしやちよつと、ここに用事が。

おえん 川さん、こなさん、酔うていやしやんすによつてな。二階で酔いを醒ましにいきやしやんせ。

梅川 あ、おえんさん、頼んだぞえ。

女中一 さ、ござんせいなあ。

梅川 はて、せわしない。今行くわいなあ。

(梅川、おえんに二階に行くと手で知らせて二階へ)

おえん 忠さん、忠さん。

忠兵衛 おえんさん、おえんさん。

おえん 忠さん、あんた、なにしてまんねんな。

忠兵衛 あんな、ちよつと蝙蝠の真似をしましてん。

おえん せつかくのところ、堪忍してくださいせ。

忠兵衛 いやいや、あんな、おえんさん。川の顔も見たことやし、これからどうしても、行かならん用事が……。 (お

えん、耳元に) あ、何しはりまんねんな。

おえん ちよつと耳を貸してくださいせいな。

忠兵衛 耳ですか。そうならそうとはよ言うとくれやす。ちよつと待つとくれやつしやー。へい、なんばなつとおつかい。

(おえん、耳元でささやく)

忠兵衛 そんなら二階で。

おえん　ちよつと忍んでいかしやんせ。

忠兵衛　おえんさん、何にも言いまへん。

おえん　えらい、色事師やなあ。

忠兵衛　あ、そう見えますか。

おえん　ささ、ちつとも早う。

忠兵衛　ありがたいなあ。

(忠兵衛、二階へ。おえん、奥へ)

〱梅川が親方　槌屋治右衛門

(治右衛門、花道より出て、戸を開ける)

治右衛門　今、戻った。なんじゃ、誰も居ぬのか。はて不用心な。これ、おえんは居ぬか。

おえん　アイ、今そこに行きますわいな。

(おえん、奥から出る。女中も)

おえん　お帰りなさいやす。遅かったやございせんか。

治右衛門　いや、寄り合いが遅うな。そんなことより、梅川は来ているか。そんなら、ちよつとここへ呼んでもらい
ましよう。

女中一 川さん、川さん。

梅川 アイ、アイ

へ思いに沈む梅川は しおれ出ればいひ

梅川 親方さん。ようござんしたなあ。

治右衛門 おお、いたか。これおえん。こなたも知つてのとおり、梅川が身の上。田舎客が身請けの相談。そこへあの忠兵衛どのが他へはやらぬ、と五十両の手付。こなたも、だんだん頼むによつて、先約の方は断つて、後からの忠兵衛どの方へ決めたところが、手付の日切りも昨日で切れた。そこへ最前、あの八右衛門どのが、金渡そうと、きつい急せきよう。このように方々から身請けと言われるも、川。こなたも大慶、親方も仕合わせ。こりや、どうでも、八右衛門どの方へ行つてもらわずばなるまいわい。

へ案じる最中に親方が 往てくれいといぢいんの一言に さしうつ向いて居たりしが
とても言わねば叶わぬことと ところを定めて

梅川 もうし旦那さん。お前の前では言いにくい事なれど、忠さんとは深い仲。それに忠さんと八つつあんとは友達仲。

それを八つつあんの方へいては、どうも世間がたちませぬ。幸い忠さんも思いがけのう大きなお金が入つたとの

便り。なろう事なら変改して忠さんの方へやっつけてくだしやんせ。申し親方さん。どうぞ、お頼みます。

へ一寸のがれの間に合いに 親方だますも辛さのあまり 治右衛門うなずきのみこみ顔

治右衛門 うむ、言いくい事を、よう言うた。こなたの言い条立ててやろう。一生持つ男、嫌じょうと思うては片時も添われまい。そんなら、八右衛門どの方はは断わって、忠兵衛どの方へやるほどに。まあ大船に乗った気でいたがよいわいのう。

へ慈悲と情けで打ちかため 槌屋は男一匹なり

通り筋から横切りに いそいそ来たる八右衛門

八右衛門 お、治右衛門いるか。あ、いたいた。お、こりや川もいたか。こりやちようどええわ。おい、治衛門、治右衛門、梅川の身の代二五〇両。さ、改めて受け取れ。へへ……

へずっと通って大あぐら

治右衛門 これ、八右衛門どの。二百五十両、頼みありがたいとも思わぬ。それに何じゃ。おなご主とあなどってか、案内あないも

乞わず、ずーっと通つて、大あぐら。そのようなものを知らぬお人のところへ子も同然の川はやられぬ。この金もいらぬによつて、き、早ういんでくださいな。

八右衛門

おい、治衛門。お前、えらい味なところへ異目をつけるな、エ。客がお茶屋へ来てあぐらかいたらあきまへんか。

ジヨラ組んだらあきまへんか。へー、お茶屋もだーんだん難しなつてきよつたな。まあまあ、座れというなら座りもしよ。けれどもな、今聞いてたらなんやて、そないものを知らぬ男のところへ、我が子も同然の川はやられんよつて身請けは断る。ええ加減にせんかい。この八右衛門は男じゃぞ。男と男が言い交わした身請けの相談、今さら変改はさせぬぞよ。

治右衛門

約束変改常のこと。金はそつちのもの。身の代はこつちのもの。この身請けの相談はふつりとお断わりいたそうわい。

八右衛門

何を言うてんねん、お前。わがままもいい加減にせんかいな。ナ。お前がはよ金くれて急いでるさかいにこうしてわざわざ持つてきてやったんや、ナ。それをやで、今になっていらんと言うんは・・・そうか、ナ。あんまりわしが川、川と言うもんやさかいに、エ、じらしておいて、この金をいのりあげるつもりか。そりや、むさいわい。きたないわい。それでは男と言われまいがな。

治右衛門

何をいうぞい。廓はもとより大坂中でちつとは知られた槌屋治右衛門。ちと人に頼まれたによつて、無理も言えば、また気ままも言う。そのかわり、三文でもむさいことする男じゃない。そう思うてもらおうかい。

八右衛門

何やて。ナニ、人に頼まれたさかいに無理も言う。へへへ、誰に頼まれたか知ってるで。言うたるか、ナ。あのワルの忠兵衛、ならずものの忠兵衛、ナラ忠に頼まれたんやろ。おきなはれ、おきなはれ。治衛門さん、あん

な奴の言うことをほんまにしてたら終いにどえらい目に会いませ。そら、あいつかて千両、二千両の金は扱いてもする。けれどもな、あらみな人の金や、ナ。我が金いうたら、そんなもん、さかさにふつても鼻血も出んそうなわい。あ、お前のとこへ納めよったあの川の身請けの手付の五十両。あれもな、為替の金を中にくすねよったんやで。ほんまや、ほんまや。お前らもよう聞きや。あれな、いつかの晩やったかいな。ままま、そんなんどうでもいいわ、ナ。わしがな、ミナミでさんざん遊んでやで。もう遊び疲れたによつて、もうそろそろ帰ろと思つてな。ええあんばいになつて、ふーらふら、ふーらふら、四ツ橋へさしかかたらな。青白い顔した男が、橋の欄干にナ、こうやつて、しよぼーんともたれとんのや。どつかで見た事あるやつちやなあ、と思つてな。だーんだんとそばに近づいて、顔をぐーっとのぞきこんだたら、アノ、ナラ忠や。ナ。「オイ、忠兵衛、お前こんなところで一体何してんねん」て、肩ポーンと叩いたたらな。あいつな、こうやつて、振り返りやがって「アー、八っさんだっか。南無阿弥陀仏」って、いきなり川へ飛び込もうとしよんねん。「ちよちよちよい待ち。」「離しておくれやす。どうぞ、このまま死なせておくれやす。」「ちよちよちよちよ、お前、なんちゆうこと言うねん。そりやまあ、お前が死のうと思ひ詰めて、よくよくのことがあつてのことやろうけれども、わしかて何ぞ力になれるかもわからへん。ナ、いっぺん、その訳聞かしてみ。て、言うたたらな。びしゃーってな地べたに座りはつてな「八右衛門さん、あんさん、ようまあ尋ねとくんははつた。わてはなあ、為替の金五十両、穴開けました。これが世間さまに知れましては親へ顔向けができまへん。どうぞ、私を助けると思つて、このまま死なせておくれやす。南無阿弥陀仏」て、また飛び込もうとしよるさかい。「ちよちよちよちよと、待て待て。お前、男が五十両ぐらいの金で死んだらあかん。ちよと待て待て待て。」イヤなあいつかて、米食う虫や、助けといたつ

たら、いずれ何ぞの役にでも立つやろと、思うたによつてな。ちようどな、ええ塩梅に、わしがその時、使い残した小遣いが五十両ぐらいあつたさかいな。「オイ待ち忠兵衛、ちようどわしがここに五十両持つてるさかい、コレお前に貸したる、ナ。ほんでな、お前の都合のええ時に返してくれたらええさかいにな、コレ使え」て言うたつたらな。あいつ、地べたへピシャーつと手をつきやがつてな「八右衛門さん。このご恩は死んでも忘れはいたしまへん」言いよつてな。あられのような涙をボロボロボロボこぼしよつてな。喜んでころこんで、キリキリつと三べん回つてワンてツーといんだなり、未だに返そうともしおらんねん。そらまあ、わしのところには、マ、五十両ぐらいの金やつたら、その辺にコロコロコロ転こんでるさかいに、かめへんようなもんやけれども、ものというもんはそんなもんじゃないわな。もろたもんはもろたもん、借りたもんは借りたもん。あんな了見でいくさつたら、養子の身じゃほどに、まあ亀屋のうちの放りだされ、行くところはなし、おこものべべでも着さらして、みじめなザマを見る様なわい。

「悪口あくぐちたらたら聞きかねて おえんはずつとそばに寄り

おえん もし、八つつあん。いえいなあ丹波屋の八右衛門さん、あんた、えらいもんだすな。よう忠さんのことを、そのように言えたもんやな。こりやなんじゃな、川さんの身請けのことがあるによつて、それを根に持つて忠さんの悪口をそない言わはる。ま、なんぼあんさんがそない言わはつても、忠さんと八つつあん、ひとつにならしまへん。忠さんはなあ、気立てはよし、器量はよし、切れ離れは良し、ふんわりとして、それじゃによつて、仲居お

ちよぼから遣り手まで、あつちやからも、わて忠さん好きやわ、うちも忠さん好きやわ、忠さん、忠さん・・・あつちやからも忠さん、こつちからも忠さん、忠さん、忠さん・・・。台所のねずみまでが、ちゅうちゅうちゅうと言わいな。それに引き換え、八つつあん、なんだす。たんまにうちに来たと思うたらな、「なあおえんや、爛冷かんざましあるか。爛冷かんざでええによつて、ちよつと飲ましてんか」むさい汚いことばかり。それじゃによつてな、八つつあんのこと、この廓では、爛冷ましの八つつあん、げじげじの八つつあん、油虫の八つつあん、ぼつかむりの八つつあん、総すかんの八つつあん、と言わいな。忠さんは、うちにとつては大事なお客。そのお方の悪口を言うようなお人は、もうもう、うちに来てもらわいでも結構や。さ、はよう帰つてくださんせいな。はよいんで。はよかえつて。ええもう、とつとといんで、くださんせいなあ。

へ存分ひいきの心から 涙いっぱい目に持つて きせるの火皿灰吹きも 砕くるばかり嘆きしが 八右衛門したり顔

八右衛門 何でそないにボロクソ言われんならんねん、エ。こここのうちに借りがあるという訳ではなし。ビタ三文ふみ倒した覚えはないで、エ。それに何や、今聞いてたら、忠兵衛はあつちやでも忠さん、こつちやでも忠さん、台所のネズミまでがチュウチュウと鳴く。そりや当り前じゃ。ネズミがニヤアニヤ泣いたらこの首やるわい、エ。それに何や、わしのごとは総すかんの八つさんやて。かまへん、かまへん。わしやな、お前らになんぼ嫌われてもかまへんねん。その代わりな、わしを好いてくれるものがあんねん、ナ。そら何やと思う、オイ。ヘッ金や、ナ。わしがな、もうお前みたいなうるさい。あつち行き、あつち行き、あつち行き言うてんにな。金のほ

うからな、オイ「八っさん、八っさん」言うてな、わしのふところへ、どーんどーんと入ってきよるんじやい。へッ。そういうと何やけどもな、あの忠兵衛はな、そらまあ確かに男前もええわ、ナ。けれどもやで、あいつは肝心の金にもてへん、ナ。イヤあんな、あの忠兵衛の肩えらいもつけど、あいつ一体どこの馬の骨か、牛の骨か知ってるか。あれはな、大和の国のどん百姓の子倅や、ナ。マ、食うや食わず・・・やったらええんやけど、あいつのはもう、食わなんだり食わなんだりというところの子倅や。へへー、そういうとちよつと失礼やけどもな、この八右衛門さまとはな、お育ちがらが違いまんねん、お育ちがらが、ナ。あんな奴がやでお前、大枚二百五十両ものの金を出して、川を身請けするというのが土台分に過ぎてるわい、ナ。まあせやな、そんなことしようと思うんやったら、うん、盗人するより他に道ないわ、盗人するより、ナ。そんなことしてみい、養子のみっじゃほどに、亀屋の家は放りだされ、手についた職はなし。マ、コソドロ、空き巣、置き引きから始まって巾着切りから矢切きり。ア、川。お前も氣いつけや。そろそろとな頭のものからしかけまでチョロまかし。若いものにみつげられて片ピンを剃りおとされ、大門口へさらされて友達までの面よごし、挙句の果てには人殺し。この家へ火でもつけさらそうわい。

へ口わんざんに梅川が 刃物があらばこの喉を 突いてなりとも 死にたいと

身をもだゆれば忠兵衛は もとより短氣の癩癩が 胸先へ差し込んで 我を忘れて つつつつといで

(忠兵衛出る)

忠兵衛 八右衛門。

八右衛門 忠兵衛か。

忠兵衛 八右衛門、全盛をはるこの廓で、忠兵衛の身代のたな卸し、よう言うてくれた、礼を言うぞよ、マママ礼を。

なるほど。わしやな、お前に金を借らぬとは言わぬ。確かに借りた。けれど、けれどそれは互いの男づく、一礼
いうて返したやないかいな。もうな、そういう事を言う奴やと思うたによつてな、わしはな、ちゃんと受け取り
を持って歩いてんねん。今見せてやる。これやこれや……。ひとつ、金五十両なり、右の金子まさに受け取り
もうし候。亀屋忠兵衛どの、丹波屋八右衛門。八右衛門て誰や、八右衛門てお前やないか。これ、返さぬ金にな
んで受け取りを書いた。治右衛門さん、えらい大きな声出して堪忍しておくれやすえ。おえんさん、あんさん、
最前よう言うてくんははった。おおきに、おおきに。川、お前もつらかったやろ。ようこらえてくれた。治右衛
門さん、これをちやつとごらんなされてくださりませ。金はちゃんと返してあります。おえんさん、おえんさ
んも見ておくれやす。川、安心してな。ちゃんと返してあるやろ、ナ。ちよつと、みんなもよう見てや。返して
あるやろ。よう見てや。この金はな、一礼言うたそのうえで、われに返してあるぞよ。それに、それになんや。
今聞いてたらな、盗みするの火をつけるのと、どの口でぬかしくさった。引きさいでもやる奴なれど、場所が場
所ゆえ、何にも言わん。

わしやな、そんな盗みせいでも、騙らいでもな、わしの親父様はナ、大和の国の大百姓。こないだもな、大坂へ
遊びにこられてな、コレ、コレコレ忠兵衛や、わが身は養子の身じゃほどに、さだめし小遣いに難儀すること
あろう。これを使え、と言うてくださったお金を、今、ここに持つてるわい。金はあるわい。金はあるわい。

八右衛門 オイ忠兵衛、お前ここのうちへ来てたんかいな。

忠兵衛 最前から二階で話はみな聞いてました。

八右衛門 それ知らんがな、ナ。イヤお前が来てると知ってたらやで、わしかてあんなこと言わへんかった。どうぞ堪忍しとくれ、ナ。悪かった悪かった、ナ。

忠兵衛 謝るんやったらはじめから言わんでもええやろ。

八右衛門 イヤイヤせやから謝ってんのや、ナ。けどやでお前かて今来て聞いてたんやったら知ってるやろうけどな、わしかて、あのおえんにもうボロクソに言われてな。ついこうカーツと来て、お前のことちよつとだけ悪う言わせてもろた。ちよつとだけや。どうぞどうぞ堪忍しとくれ、ナ、悪かった。謝る。ナ。せやけどこんなところで、お前とわしが喧嘩したらみつともない、ナ。もう堪忍して。ア、ボンボンたて先が曲がってまっせ。

忠兵衛 さわらんといて。やまて。

八右衛門 そない怒りないなや。わしが謝ってんのや、ナ。まあそやな。親しき仲にも礼儀ありと言うからな。亀屋のボンボン若旦那、堪忍しておくれやつしやー。

忠兵衛 もうええわいな。

八右衛門 へへ、そんならもうええか。せやけどもな。今聞いてたらなお前んとこの親父さん、大和の国の大百姓言うたな。

忠兵衛 まあ田地の四、五丁も持ってござるがな。

八右衛門 エ田地の四、五丁。えらいもんやな……。オイ忠兵衛、それよその親父さんとちやうか。

忠兵衛 何を言うてんねんな。

八右衛門 そんでなにやて、その親父さんから小遣い貰うて今持ってると言ったな。

忠兵衛 ああ、あんな、ここへちやんと持ってます。

八右衛門 ええ親父さんやな。

忠兵衛 親というのは有難いもんじゃなあ。

八右衛門 大事にしいや。

忠兵衛 そう思うてます。

八右衛門 そうか。ほなええけどな。イヤな、わしかてな、お前んどこに負けへん、ええ親父さん持っててなあ。イヤあんな、今日出掛けしなにやで、「親父さん、コレいかさせてもらいますわ。」言うたらな、「オイ八右衛門、お前男が遊びに行くに小遣いがのうてはみつともない。ナ、これ持って行き」言うてな、くだされたお金が、へ、ここに二百五十両。二百五十両いうたら重たいもんやで。よう見いや、ええか。それ、ずしーん。ぐーらぐら、ぐーらぐら。家揺れてるがな。へへ、それ、ひよい、ひよいひよいひよい。頭痛のまじないや、ちよつといただいき。

忠兵衛 おいやめて、験の悪い。

八右衛門 オイ、忠兵衛忠兵衛。お前もな、そのええ親父さんに、ほんまに小遣いもろうて持ってんやつたら、わしみたいにこない出してみせてーな。

忠兵衛 わしが嘘ついてると思うてんのか。わかったわかった、ちよつと待て待て。

八右衛門 出してくれんのか。

忠兵衛 ほんまちやんと持ってます。手、貸してみ。あんな、あの、ここにな、かたいもんがあるやろ。

八右衛門 ある。

忠兵衛 あるやろ。これが金やがな。

八衛門 お前何を言うてんねん、オイ。「ここに固いもんがあるやろ、これが金や。金や」って。そんなん上から触ってわかるかいな。ナ。第一なんや手触りがおかしかったでお前のは、ナ……。ア、そうかそうか。わしがあんまりお前のことをボロクソに言うたもんやさかい、カーツとなつて、裏庭にドドドドと飛び降りて行って、石やかわらをふところ入れて、これが金や金やて言うてるんやろ。

忠兵衛 何をいうてんねん。なんでわしが、そんな石や瓦を懐にに入れて金や金やと……。

八右衛門 ほんなら、お前、わしみたいにこないだして、ずしーんやつて見せてくれればそれでええやないか……。
忠兵衛 出して見せんでも、上から触ったらわかるやろ。

八右衛門 お前、やっぱり、石や瓦やろ。石や瓦や。みんな聞いてーな。こいつ、石や瓦をもって、金や金やと言うてんねん。そりや出されへん。やめとけ、やめとけ。あほらし。

忠兵衛 わかった、わかった。そない言うんやったらな、お前とな、おんなじようにしてやる。なんで、わしが、石や瓦を懐にに入れて金や金や言わんならんねん。ええか、よう見いや。これが、ほんまの小判の重み。それ、ずつ……ずしーん。ひよい、ひよいひよいひよい。頭痛のまじない、ちよつといたしたいとき。

八右衛門 あ、やめてくれ。験の悪い。何するんじやい……。おい、おい忠兵衛。お前のなんや、がっしやーんって音がおかしかったで。お前のは石や瓦みたいな音してたで。おい、よう聞いとけよ、ほんまの金というのはな、それ、ずしーん。って、ちやうやないか、お前。あ……。そやそや、わしもそんなこと言うて、こん中に、石や瓦が入

つていると思われたらけったくそわるい。オウ、今出して見せてやるさかい、待っとけよ。ええか。あ、お前ら、窮屈やったやろ、今だしたるよつてな、ちよつと待ちや。へへ。お、ほれ出た、金百両。おい、ちよつと待つてや、まだあるで。お、ほら出た、もひとつ百両。まだありまっせ。ちよつと待ちや。おお、ほら出た。五十両。しめて二百五十両。忠兵衛、お前もな、そのええおやつさんから、ほんまに小遣いもろうて持ってんやつたら、わしみたいに、こない出してみせてーな。

忠兵衛　なんでそんな出して見せんならんねんな。

八右衛門　わしがだしたんやから、お前もだしたらええやないか。なんで出されへんの。お前もってへんのやろ。もってへんのやろ。

忠兵衛　持ってます。

八右衛門　おい、みんな、こいつ持ってへんのに、持ってる持ってるってみつともないやつちゃ。ともだちがいのない、恥ずかしいやつちゃ。

忠兵衛　わかりました、もう。そない言うんやったらな、今、今出してみせてあげます。

八右衛門　出して見せてくれるんかいな。

忠兵衛　あんな、よう見いや。金百両。これ、ちゃんと書いてあるやろ。

八右衛門　わからんがな。ちよつと、待ち。金百両で……。お前のは出すより、しまう方が早いやないか。なんで、わしみたいに出して見せ……。あ、おいおい忠兵衛、それほんまの金か。

忠兵衛　ほんまの金です。

八右衛門 おう、ほな、ほんまの金やったら、こんな音するか。よう聞いときよ、ええか。それ、コツコツ、コツコツ。ええ音するやろ。オイ、大和の金って音しまつか。

忠兵衛 大和の金も、大坂の金も一緒に決まってるやないかいな。

八右衛門 ほな、わしみたいに、コツコツとして聞かせてーな。

忠兵衛 音聞かさんでも、ちゃんと上から見たらわかるやないか。

八右衛門 わしみたいに聞かせてーな。あ、わかった、ひよつとして大和の金というんは、土くれで出来とんのや。

忠兵衛 なんで大和の金が土くれやねん。

八右衛門 ほんなら、コツコツして聞かせてくれや。なんでできへんの。やっぱり土くれや、土くれや。

忠兵衛 今、聞かせてやります。大和の金が土くれやて、大和を馬鹿にしてからに、もうもう。腹の立つ男や。ええか、よう聞きや。大和の金も、大坂の金もおんなじ音。それ、コツコツ、コツコツ。ええ音してるやないかいな。

八右衛門 おい、お前んのは、コツコツ、って口で言うてるだけやないか。音がちやうわ、音が。

忠兵衛 耳がおかしいんや、もう。

八右衛門 こんなところで、音がどないやゆうてもしょうがない。よっしゃ、こうなったらな、わしがこの、小判の封を切つて見せたるによつて、ちよつと……。

忠兵衛 待つて。

八右衛門 なんや。

忠兵衛 そんなことせいでええて。

八右衛門 わしの金やがな。

忠兵衛 やめて。

八右衛門 わしの金をわしが開けて何が悪い。

忠兵衛 そんなこといまやらいでも。

八右衛門 ほっといてくれ。もううるさいやっちゃな。よし……。今、出したるで、ちよっと待ったときや……。それ、でたでた、ほれ山吹色。ええ色してるわ。わし、この色好きやねん。おい、お前らも好きやろ、な。それ、ちんちろりん、ちんちろりん、のんのんさんのわらじ。ええ色、ええ音してるわな。おい、忠兵衛、忠兵衛。忠兵衛。おまえもな、ほんまにおやっさんから小遣いもろうて持ってたたら、わしみたいに、こない封切って見せてーな。忠兵衛 金というもんわな、使うときに封を切ったら、それでええやないかいな。

八右衛門 待ちんかい、わしが封を切って見せたんやさかい、お前も封切って見せてゆうてるがな。

忠兵衛 そんな行儀の悪い。

八右衛門 なんで、封切られへんの。あ、わかった。ひよっとしてお前の持つてる小判いうんはな、えー本年の吉兆はここじゃい。ここじゃい。という十日えびすのえびす小判やろ。見せられへん、見せられへん。

忠兵衛 なんでわしがえびす小判持って歩かんならんねん。

八右衛門 そんなこというたかて、お前のは音がおかしいやないか。わしみたいに封切って見せんかいな。

忠兵衛 なんで、なんでこれが音がおかしいいうんや。今聞かしたるからよう聞きや。ほれ。コツコツ、コツコツ。ちやんとほんまの小判の音してるがな。

八右衛門 ちやうちやう、よう聞いとけ。これがほんまの小判の音や。それ、コツコツ、コツコツ。音がちやうちやう。
忠兵衛 一緒やないかいな。

八右衛門 ちやうちやう。これがほんまの小判の音や。

忠兵衛 おまえ、耳が悪いのとちがうか。

八右衛門 あほぬかせ。わしはな、とびきりいい耳しとんじやい。

忠兵衛 そんならおんなじってわかるやろ。

八右衛門 ちやう、よう聞いてみい。これがほんまの小判の音や。

忠兵衛 どこがちがうねん。

八右衛門 音がちやう。音がちやう。

忠兵衛 一緒やないか。一緒やないか。

八右衛門 忠兵衛、忠兵衛、忠兵衛。みっともないことしいなや。わしは金のあるのが因果。お前は金のないのが因果。金のないのは、首のないのおんなじこっちゃ。あのここな、どがいしよなしめ。

(忠兵衛、押される勢いで封が切れる)

忠兵衛 五十両、百両。

(見得)

忠兵衛 なんで、なんで、これがえびす小判や。いま、みせてやる。百五十両。二百両、びっくりするな、ママママまだあるわい。

こうなったらな、みな、みな見せてやる……。二百五十両、三百両。八右衛門、どどどんなもんじゃ。

八右衛門の意気地ぞ ぜひもなし

八右衛門 気をのまれ

八右衛門 おお、びっくりした。イヤ、おそれいりました、たいしたもんや。亀屋の若旦那、へい、おそれいりました。おい、忠兵衛、これは友達のよしみじゃによつて、言うて聞かすのじゃがな。お前のうちは、金に一夜の宿を貸す飛脚屋商売。この金が、お前の金ならよけれども、ひよつとして、あじーな金であつたなら、お前のこの首は、胴についてはいぬぞよ。

忠兵衛 なんかすぞい。

八右衛門 おーこわ、おーこわ。なんや寒氣してきた。いなしてもらいますわ。こんなところに長居してたら、えらいことにかかわりなつたらかなわん。いなしてもらいます。風邪ひいたらえらいこつちやな。よしよし、いなしてもらいやつさ。わしゃもう、いにまつせ、いにまつせ……。おっと……。あ、手ぬぐい落としてもた……。おお、これ、わしの手ぬぐいやで。おう、川。お前も忠兵衛に請け出されて、よかつたな。ああ、おえんさんもよかつた、治右衛門さんもよかつたな。総すかんの八つつあん、いなしてもらいます。どなたもおおきに、おやかまつさん。

(八右衛門、封印を見る)

役所をさして

(八右衛門、花道へ)

治右衛門 若旦那、ようご辛抱なされましたな。

忠兵衛 治右衛門さん、はしたのう騒ぎ立てて、堪忍しておくれやっしや。おえんさんも、すまんこつてございましたな。

あんな、治右衛門さん。先にお渡しいたしました川の身の代の手付五十両、それにな、ここにあの、二百両。ちよつと待つとくれやっしや。ちようど、これで二百両、どうぞお納めくださいませ。

治右衛門 川が好いたところへやるのが、わたくしども喜び。そうして、これが、梅川が年季証文。確かにお渡しいたしました。お、そんならわしは、届の方をすましてまいりましょう。ああ、そうや、おえん。梅川もこれから、亀屋の内儀、梅川でもあるまいわな。おお、そうや、元の名前に返り咲き、お梅はどうであろう。おうめ、おうめ、おんめでとう、ござります。

(治右衛門、出ていく)

忠兵衛 ときにな、おえんさん、わたしやあの、八右衛門へのつらあてに、これからすぐに、川を連れていきとうござりまするゆえ、あとはええように、頼んます。

おえん あのな、たとえ身請けが済んでも、月行事から札をとらんと、大門を出ることはできまへん。今からみんなでは

ーと行ってな、らちを開けてまいります。お二人仲良く、ここで、お留守をお頼みもうしまつせ。

忠兵衛 すんまへんな。

(おえん、門口へ)

おえん さあさあみんな、ともしや、ともしや。

女中皆々 あいあい。

(おえん、女中、花道へ)

忠兵衛 はよ、はよ・・・。

梅川 忠さん、四年この方くるわへきて、門出の勝手も知ったお前が、なぜそのように急せかしゃんす。

忠兵衛 急かねばならぬ、道が遠い。

梅川 そりやまたどこへ、行くのじゃえ。

忠兵衛 これ、川。いまのあの金はな、ありやお屋敷の為替の金、その封印を切ったれば、忠兵衛がこの首は、胴につい

ては、いぬわいやい。

梅川 しええ。

忠兵衛 これ。

(忠兵衛、門口へ。のれん、落とす。)

梅川 忠さん、どうしよう。

忠兵衛 もつともじゃ。

梅川 どうしよう。

忠兵衛 もつともじゃ。

梅川 どうしようぞいのう

忠兵衛 もつともじゃ。

(泣く)

忠兵衛 さささ、堪えるだけは堪えてみたが、親方の手前といい、八右衛門への面当てに、引くに引かれぬ、男の意地。
やぶれかぶれの、封印は。

へ地獄のうえの ひと飛びと

忠兵衛 覚悟きわめて切った封印。これ、わしを不憫と思うならな、どうぞ一緒に、死んでくれ、死んでくれ、死んでくれ……。死んでくれにや、どうもこうも、なりやせんがな。

へ事を分けたる一言に 男の膝に 取りすがり

梅川 死んでくれとは、もつたいない。わしや礼言うて死にますわいなあ。せめて三日なりとも、こちのひと、女房よ
と、言われて死にとうござんすわいな。

忠兵衛　もつともじや、もつともじや。わしも母やお諏訪の手前、この金のあるうちは、いずこへなりとも、落ちのびて、金の切れ目が、命の切れ目。

梅川　許嫁のお諏訪さまや、母御さま、私をお恨みなさんしよう。恨まれてもどうしても、離れられぬが互いの悪縁。
忠兵衛　お許しなされて。

二人　くださりませ。

へ詫びるも二人　詫びらるる　こころぞ同じ　涙なり

(おえん、女中戻ってくる)

おえん　さらりと埒あきました。札は西口に落ちましたわいな。

へ聞くも西方西向きの　知らせに二人は　気もわなわな

梅川　もし、これは、私のさしものなれど、かたみ・・・、とっておいてくださいんせ。

女中二　これはまあ、ありがとうござんす。そんなら川さん。もう行かしゃんすか。

女中三　さぞ、おうれしゆう。

皆々　ござんしような。

女中四 おめでたいと。

皆々 申そうか。

女中一 御名残おしいと。

皆々 申そうか。

おえん 千日言うてもかえらぬこと。

忠兵衛 その千日が肝先。

へ焼き場の土とは

おえん おめでとうさん。

忠兵衛 おおきに。

へなるまいと

忠兵衛 二人で一緒にいては、人目に立っては悪いによつて、こなたは先に西口で足を洗うて待っていや。

梅川 そんなら忠さん。

忠兵衛 サ、はよう、はよう。

(女中、梅川外へ)

へ言うて出るのが この世の名残り

女中二 嬉し涙さま。

皆々 嬉し涙さま。

梅川 うれしいやら、かなしいやら、夢のようでございます。忠さん、西口で待っているぞえ。

(梅川、女中、花道から出ていく)

忠兵衛 これはな、些少じゃけれども門出の祝儀。皆さんにあげておいてくださんせ。

おえん ありがとうございます。

忠兵衛 これはな、私と川と、あと年ごろ・・・治右衛門さんによろしゅう。

へしばしの栄華も人の金 あとは野となれ大和路や

(忠兵衛、花道へ)

おえん もし忠さん、お近いうちに。

忠兵衛 近日、近日。

(羽織を羽織る)

忠兵衛 さようなら。

(幕)